
内気少女の静まらない夜

麻上 椎弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

内気少女の静まらない夜

【Nコード】

N3745V

【作者名】

麻上 椎弥

【あらすじ】

天ノ宮高等学校。普通科、専門学科、総合学科のすべてにおいて優秀で、毎年定員の数倍は受験者が現れるという有名校だ。そんな学校の普通科に通うことになった引つ込み思案な少女、湊川紗世。親戚の家から通うはずだったのだが、何故か寮で生活することに。しかもその寮の住人はクセ者揃いで。ごくごく普通の高校生の、日常系ラブコメディです。

「もうすぐ高校生」その1

長い黒髪を風に揺らされながら、少女はアスファルトの上を歩いて
いる。

湊川みなかわぎよ紗世、十五歳。幼い子供のように白く柔らかな肌、華奢な体つきにも関わらず、ちゃんと成長している胸。

そして、ぱっちりとした大きな瞳は、数年ぶりに訪れた町並みに輝いている。

前にこの道を歩いたのは中学一年の冬休みだった。雪こそ積もっていないものの、今見ている景色はあのとときと何も変わらない。

紗世がこの春から通う学校は、家からずいぶんと遠くにある。電車を使ってもいいのだが、そうなるのかなり早起きをしなければなら
ない。朝に弱い紗世としては遅刻が心配なのであった。

そこで、その学校の近くにある親戚の家でお世話になることになった。昔は夏休みや冬休みの度に遊びに行ったものだが、最近では滅多に訪れなくなっていた。明確な理由は分からない。強いて言うなら、もう子供じゃない、ということだろうか。

東京の中心ほどではないが、今歩いている場所もかなりの都会だ。

同じ県内なのに都会と田舎にはこれほどまでの差があるのだと、数年ぶりに実感した。

来年度から紗世が通い始めるのは、天ノ宮あまのみや高等学校。

普通科、専門学科、総合学科。このすべてにおいて優秀で、毎年ものすごい数の生徒が受験する人気校である。

その天ノ宮高等学校（略称『天高』）普通科に合格した紗世は、今こうして学校の近くにある（といってもバスで通学することになる）親戚の家に向かっている。

「久しぶりだなあ」

目的地である一軒家を見上げて、紗世はぼつりと呟く。

いとこの小学生 聡史さとしが二階の窓から顔をのぞかせている。数年ぶりに見た聡史の顔は成長を感じさせるものだった。前見たときはショートカットの女の子でも通ってしまいそうな顔立ちだったのに、紗世に気づくと、聡史は窓ガラスをバンバン叩いて口をパクパクさせている。何を言っているのかはよく聞こえない。窓を開ければいいものを。

聡史に軽く手を振って、紗世は玄関まで歩いた。チャイムを押して、そのまま扉の前で待っている。

「久しぶりね。あらまあ、美人になって」

以前と何も変わっていないおばさんが、紗世を見て嬉しそうな顔になる。数年経って、おばさんと視線が同じになっていた。

「久しぶり。これからお世話になります」

「ああ、そのことなんだけど」

「お姉ちゃん、いらっしやいー!」

おばさんが何か言いかけたが、どたどたと階段を下りてきた聡史の声によって打ち消された。

「聡史、騒々しいよ」

おばさんの叱咤を、聡史は「ごめんごめん」と全く反省していない様子で流して続けた。

「でもお姉ちゃん、何で家に来たの?」

「何でって……」

これからこの家で暮らすということ、聡史は聞いていないのだろうか。ううん、家族が増えることを前もって知らされないなんておか

しい。おばさんの様子からして、話に通っていないわけではなさそうだし。しかし、聡史は本気で分からないという面持ちだ。

「聡史、あなたは二階に上がってなさい。大人の話があるから」

おばさんの声が内心小首を傾げる紗世の意識を現実に戻した。

「はい」と聡史はしぶしぶ階段を上って行った。

おばさんに促されて、紗世はリビングの椅子に腰を下ろした。その向かいにおばさんが座り、両腕をテーブルに置く。

「さつきも言いかけたんだけど……紗世ちゃんには、寮で生活してもらおうと思ってるの」

「はい？……冗談？」

紗世が訊くと、おばさんは無言でかぶりを振った。

「誤解しないでほしいんだけど、別に家に来てほしくないって言うてるんじゃないのよ。これは、紗世ちゃんのためなの」

「私のため？」

どろが、と続けそうになってそれを呑み込んだ。

「そう。ほら、あなた集団生活とか好きじゃないでしょう？」

紗世はこくりと頷いた。だからあえて寮に入らずこの家に来たのだ。

「だから、その練習だと思えばいいのよ。天高って大きな学校だし、中学に比べて生徒数も一気に多くなるわ。そこで、あえて寮生活を送って集団生活の楽しさを学んでもらおうと思って」

冗談じゃない。それが嫌で親戚の家から通うことに決めたのに、これでは何の意味もないではないか。

「嫌」

「そう言うと思ってたよ……実はもう、手続きは済ませてあるのよね」

「はあ!？」

普段は物静かな紗世だが、さすがに声を荒げずにはいらなかった。本人に何の相談もなく、勝手にそこまで話を進めるなんて。

「てへっ」

おばさんは右手をグーにしてこつんと頭を叩いた。仕草が古いうえに可愛くない。

「てへっ、じゃない」

「だって、こうでもしないと納得してくれそうもなかったんだもん」「今私が納得してるとでも?」

「やだ紗世ちゃん、可愛い顔が怖くなっちゃってるわよ」

紗世は深く溜め息をついた。手続きが済んでしまった以上、どうしようもないのだ。いくらおばさんに文句を垂れたところで、現状は何も変わらない。

「心配しなくても、家賃はこっちで払うから」

「そんな心配してない……」

紗世はがっくりと頂垂れた。受け入れるしかないのだろうか。

「その寮って、どんなところなの？」

天高は生徒数が多く、地方からの受験生も少なくない。それを考慮して、天高にはいくつもの寮がある。

選択肢がある中おばさんが選んだ寮なのだから、人との交流に消極的な自分でも平気な場所なのだろうと思った。

すっかり親戚の家から通う気でいたから、寮についての情報はほぼ皆無に等しいのだ。

「学校から一番近いところ」

おばさんは笑顔で言った。気兼ねの欠片もない満面の笑みに、自分は聞き間違いをしているとさえ思った。

「そんなに心配しなくていいわよ。家賃もずば抜けて格安だったし、空き部屋もたくさんあるらしいから」

学校から一番近いのに、空き部屋があつて家賃が格安なのはおかしいだろう。

それを言つとまた面倒なことになりそうなので、紗世は黙って頭を抱えた。

だが、考え方を変えてみてはどうだろうか。空き部屋があるということは、寮生はどちらかというと少人数になるのだから、人が溢れ返っているような環境よりは望ましい。

あくまで他の寮に比べれば、なのだが。

格安なのはお化けが出るからです、なんてことはありませんように。すべてを諦めても、それだけは強く祈った。

「もうすぐ高校生」その2

地図を片手に、紗世は街を歩いている。途中で天高を通り過ぎた。中学とは比べ物にならないほど大きな校舎。校舎内で迷子になってしまいそうだ。

寮は本当に学校のすぐ近くで、徒歩五分ちよつとで到着した。

一般的な学生寮の大きさは分らないが、特別大きいわけではないと思う。余計な飾り気はないが（一般的に学生寮とはこういうものなのかもしれない）、殺風景だと思わせることはない。それはきつと、雰囲気新しいからだろう。

「ええつと……まず、管理人の先生に挨拶すればいいのよね？」

人との交流に欠けているうえに入居の挨拶なんて初めてなので、もう右も左も分からない。誰かに聞いておけばよかった。

チャームを押して、どきどきしながら人が出てくるのを待つ。やがて、扉が開いて女の人が出てきた。

「あの」

声をかけようとするが、女の方は紗世をすり抜けて走って行ってしまった。

「待ってよ」

もう一人、派手な服を着た女の人がさっきの女の人の後を追って駆けてゆく。

紗世は啞然としてその様子を眺めていた。

何？さっきの人たち、何で逃げてるみたいだったの？

「あーあ、逃げられた。先生が無愛想だから」

「関係ないだろう」

声に釣られて正面を向くと、そこには二人の女がいた。

一人はライトブラウンの髪を胸元まで伸ばしたつり目の美少女。アイドルか、もしくはモデルかと問いたくなるほどの美貌を持っている。

もう一人は大人の人で、髪を低い位置で一つにまとめている。かつちりとした真面目な服装に身を包んでいて、銀縁の眼鏡がよく似合っている。

「あのう」

先程逃げて行った二人組が気になりながらも、紗世は控えめに声をかけた。さっきの台詞からしても、この眼鏡の人が先生兼管理人であることは間違いなさそうだ。

「何？また見学者？」

つり目の美少女が問う。また、ということはずでに何人か見学者が来たということだ。ひょっとして、さっきの女の人たちがそうなのだろうか。

「いえ、入居予定の者ですけど……」

「もしかして、湊川さん？」

眼鏡の人が食いつくように訊いた。若干気後れしながら、紗世は首を縦に振った。

「そうか。よく来てくれた。ちらかつてるけど、どうぞ入ってくれ。
……ああ、自己紹介が遅れた。私はこの管理人、あおやまなつえ青山夏恵だ」
「あたしは清水結菜。しみずゆいな三年生だから、あなたの先輩ってことになるわ」

眼鏡の人 夏恵と、つり目の美少女 結菜が名乗る。

「湊川、紗世です。普通科です」

この自己紹介の短さは自分のコミュニケーション能力のなさをよく表している、と自嘲的なことを思った。

「立ち話もなんだから、上がってくれ」

夏恵に促されて、紗世は靴を脱いだ。夏恵と結菜の他にも、男物の靴がある。

「まず、ここがリビング。食事は交代制で作っている」

へえ、と思った。料理の出来ない紗世としては『問題なし』と胸を張って言うことはできない。おばさんには『料理なんて繰り返ししていくうちに慣れるわ』と言われたけれど、集団生活そのものに負けないくらい不安要素である。

キッチンも最近のカタログに載っている様なきれいなもので、思わず目を奪われていた。

そして、そんなきれいなキッチンにふさわしくないものが流し台からちらりと見えた。

「あ」

夏恵が声を漏らした。かと思うと、早足でキッチンに向かって流し台のそれをゴミ袋に捨てた。

「いつもこうではないのだぞ。今回はたまたまだ」

そう言い訳をする夏恵の表情は、何とんでもポーカーフェイスを保たねばと心掛けていることが丸分かりだった。

流し台にあったのは、カップラーメンの箱だった。ちなみに中身は空。

「部屋は個室だから、自分の部屋なら好き勝手使ってくれて構わない」

空き部屋を見せてもらうと、自分の部屋より少し狭いくらいだった。これだけ条件が揃っていて、どうして空き部屋があるのだろう。それに、さっきの二人組の様子も不可解だ。

「ここがこれから君の部屋になる。隣は結菜の部屋で、その隣は…
…今は空き部屋だが、入居予定の者がいる」

ということとは、紗世と同じ新入生だろう。どんな人だろう、と紗世は大して興味もなさげに内声呟いた。

「遊びに来たかったら来てもいいわよ。あんたはあたしの下僕になるんだから。あたしは優しいから、

下僕の面倒を見てあげるわ」

「下僕？」

紗世は僅かに首を傾げた。

「結菜、発言は慎め。さっきの女の子たちも結菜の言動にドン引きして出て行ったんだぞ」

「あたしに指図するんじゃないわよ」

なるほど、さっき二人組が逃げに行った理由はこれだったのか。確かにいきなり『下僕』扱いされればヒンシュクを買うことだってあるだろう。

「さて、次だ。心配しなくても、お風呂とトイレは別にある」

お風呂は小さめだが、姿見を壁にくっつけたような大きな鏡が目立った。よく思っただが、お風呂にある鏡はどういう用途があるのだろうか。

トイレはごく普通の洋式トイレだった。「男女共同だから気をつけなさい」と結菜のコメントもあった。

「もつすぐ高校生」その3

「一通りの紹介が終わったのだが」「最後は同居人の紹介ね」
「えっ？」

夏恵と結菜の声がかぶった。

「そんなの、同居が始まってからでいいのでは……」

「何言ってるの。せつかくいるんだから、今やっちゃえばいいじゃない」

「しかし……」

「あたしがやると言ったらやるの。これは決定事項よ」

問答無用と言わんばかりに、結菜は先陣を切って歩いて行った。紗世と夏恵は顔を見合わせ、結菜について行く。

ある一室の扉の前で立ち止まると、結菜はノックもせず扉を開けた。プライベートは無視のようだ。

「入居者が来たわよ」

結菜の言葉に、本を読んでいた少年が振り返る。もしかしたら彼目当てに入居してくる女の子もいるのではないだろうか、と思えるほどの美少年だった。

「この寮に入居してくるなんてどんな物好きかと思えば、まさか女の子とは」

台詞とは裏腹に、黒髪の美少年はさほど驚いてはいない様子だ。

少年は本に琴を挟み、それを机の上に置いた。そして、くるりと椅

子を回して向き直る。

「この人は成瀬東樹くん。総合学科二年生」

本人に代わって、結菜が紹介する。

「湊川紗世、普通科一年です」

黒髪の美少年 東樹はじつと紗世を見据えた。自分の顔に何かついているだろうか、紗世は両頬に触って確かめてみた。何もついていない。

「何でもない。普通の子だなあ、と思ったただけだ」

「……それが？」

普通で何が悪いというのだ。それとも、逆に普通だと何かおかしいのだろうか。

「いいや、本当に何でもない」

結局何なのだ。

釈然としないでいると、東樹はポケットから携帯を取り出してどこかに電話をかけ始めた。

「誰に電話してんの？」結菜が訊く。

「せっかくの入居者だ。あいつらも呼ぼうと思ってな。……もしもし……ああ。なんと入居希望者が来た。……あいつも呼んですぐに来い。……いいじゃないか。今日会おうが今度会おうが一緒だ」

言って、東樹は通話を切った。半ば強引だった気もするが、どうや

ら誰かをここに呼んだみたいだ。

「問答無用、って感じね」

「先輩にだけは言われたくありません。……いや、もう一人強引なやつがいたか」

それから五分もしない間に、来客を告げるチャイムの音が聞こえた。

「やけに早いな」と夏恵。

「たまたま近くを通りかかっていたのかもしれない。それに、見学者という可能性もあるからな」と東樹。

「そうね……だったらあたしが出迎えてあげるわ!」

「先輩が出迎えると第一印象が　って、もういない」

東樹の言葉も聞かず、結菜は玄関に向かって駆けて行った。

「私たちも行くか」

夏恵の言葉を合図に、紗世たちも玄関に向かった。

「もうすぐ高校生」その4

玄関に行くと、そこに来客の姿はなかった。ただ、結菜が不愉快そうな表情で立ち尽くしている。

「結菜………?」

夏恵は心配そうな表情で結菜の顔を覗き込んだ。

「逃げられたわ。『ここに入居すればもれなくあたしを崇められるわよ』って言ったら……」

「当然の行動だな」

東樹の呟きに、結菜はキツと顔を上げた。

「いいわよ、いいわよ!こんなことで逃げ出すようなヤツと同居なんて、こつちから願ひ下げなんだから!」

「開き直って逆ギレするな!」

「そうですよ。そもそもその態度がいけないんですから」

「東樹君、火に油を注ぐんじゃない!」

ぎゃあぎゃああと玄関先で言い合う三人に、紗世は困惑するしかなかった。自分が事態を收拾できるとは到底思えないし、それ以前にこの限りなく喧嘩に近い会話に入りたくないなんて思わない。

「玄関先で何騒いでんだよ」

声のする方を見ると、紗世と同じくらいの年であろう男の子がいた。多分、十人中九人はその容姿を『可愛い』と称するだろう。

「ほんとだよ。ドア越しでも声聞こえてきたよ?」

その背中からひょっこりと出てきたのは、小学生くらいの男の子だった。その子は紗世の姿を見ると、ぱちぱちと何度も瞬きをした。

「ねえ、もしかしてこの子が入居者?」

小学生くらいの男の子の問いに、「そうだ」と東樹が短く答えた。

「はじめまして。おれは普通科一年の^{かぶい}楠木^{せきぎ}竜^{りゅう}」

小学生くらいの男の子　竜が人懐っこい笑顔で言った。

普通科一年ということは、もしかしたら自分と同じクラスになるかもしれない。　同じ?」

「え、一年?私と同じ年?」

確かに、竜は普通科一年と口にした。しかし、その姿はどう見ても小学生そのものだった。いとこの聡史と並んでも、そこまで年が離れているようには見えそうもない。

「まあ、驚くのも無理はない。むしろ驚かないほうが不思議なくらいだ」

東樹が小さく嘖き出してからそう言った。何故嘖き出した?

「おれは別にいいんだけどね、嫌じゃないし」

そう言うてはいるが、竜の表情はどこか不服そうだった。やはりあ

そこまで驚くのは失礼だっただろうか。

「オレは辻原満^{つじはらみこと}。こいつと一緒に普通科一年」

続いて満も自己紹介する。普通科一年、この子も紗世と同じだ。

察するに、おそらくこの二人が人居予定の人たちだろう。ということとは、紗世と夏恵を含めて寮生は六人。

「結構いるじゃない……」

「どうかしたか？」

紗世の声に夏恵が反応した。誰にも聞こえないように呟いたつもりだったのに。

「いいえ、何でもありません」

表面上笑顔を作って、内心では溜め息をついたのであった。

「つつか、もしかしてオレたちはこのためだけに呼ばれたのか？」

「ああ、そうだな……… ついでに、部屋の説明もしてもらおうといい」

「絶対今考えただろ」

「満、つつこむだけ無駄だよ。別にいいじゃん、どの道説明受けることになるんだから」

それもそうか、と満は竜の言葉にあっさり納得した。

「すまないね。終始煩わしくて」

帰り際、玄関で靴を履き終えたタイミングで夏恵が言った。今この場にいるのは、紗世と夏恵の二人だけだ。

いえ、と紗世は笑ってみせた。

本音を言おうと煩いとは思っているが、勿論そんなことを表には出さない。

「最初は戸惑うことも多いと思うし、あのテンションについていくのは厳しいだろう。だが、何日かすればある程度は慣れる。私も、何か困ったことがあれば力になろう」

夏恵の言葉が頼もしい。紗世はこくと頷いた。

正直、数日経ったところで寮生活に馴染めるとは思えない。集団生活を嫌い、静かな場所を好む紗世にとって、これから先この寮で暮らすことは不安でたまらない。

勝手に寮生活を決めた親たちを恨まずにはいられなかった。

「ちょっとクセが強いだけで、あいつらも悪いやつじゃない。そこは分かってくれ」

紗世はまた頷いた。悪い人だとは思っていない。初対面である紗世に気さくに接してくれたし、紗世の入居を嫌に言う人もいなかった（内心思っていたのなら話は別だが）。

「それと。言い忘れていたが、この寮では寮生を下の名前で呼ぶというルールがある。親睦を深めやすくするためだ。私も君のことは紗世さんと呼ばせてもらうが、構わないか？」

「はい、構いません」

「とはいえ、さすがに私のことを呼び捨てにはするなよ。一応教師だからな」

「はい、先生」

言うと、先生は少し表情を崩した。その意味が分からなくてきよとんとしている、夏恵は「すまない」と崩れた表情のまま続けた。

「素直だと思ってな」

「……そう、ですか？」

「ああ。少なくともうちの寮生たちよりは」

それはきつと基準がおかしいだけだろう。どう返事をしていいかわからず、紗世は黙っていた。

「じゃあ明日、改めて」

「はい。さようなら、また明日」

高校生になるまであと少し。

湊川紗世。寮生デビューも高校生デビューも、もうすぐだ。

「寮生活のはじまり」その1

アラーム音がうるさい。

まどろみの中、紗世さよは思い瞼を開いた。

あと十分だけなら、急いで仕度をすれば間に合う。紗世は目覚まし時計の頭を叩いて、再び枕に頭を預けた。重力が無くなってゆく。心地いい感覚に包まれていると、嫌なことを何も考えなくてすむ。目覚めたら学校に行かなければならない。なら、ギリギリまでそのことを忘れていたいのだ。

「おい、起きろ」

男の子の声が聞こえる。聡史の声とは違う……これは夢だろうか。

「ううん……後十分だけ……」

声のする方に背を向けるようにして、紗世は寝返りをうつ。

「目覚ましセットしてある時間から、今で十五分後だ」

「むづ……」

しづしづ瞼を開けると、そこには見慣れない天井が広がっていた。少し首を回すと、可愛らしい男の子が紗世を覗き込んだ。誰？と声を上げそうになって思い出した。

そうだ。私、寮に入ったんだ……。

本意ではないが、私はこの学生寮で生活することになった。学校から徒歩五分強という、通学にはこの上なく最適な場所。部屋は個室で狭苦しくもなく、加えて家賃が格安と一般的な条件としては最高の寮だ。

紗世は体を起こして、欠伸をかみ殺した。まだ眠い。

「まったく、何でオレが……」

カーテンを開けていると、背中越しに文句が聞こえた。

この少年は辻原満つじはらみつる。紗世と同じ天ノ宮高等学校。略して天高の普通科一年。そして、紗世の隣の部屋の住人である。

満が部屋を出て行ったのを確認して、紗世は着替えを始める。初めて着る高校の制服。中学のときのセーラー服とは違うブレザータイプが新鮮だ。

髪を整えて、もう一度身なりをチェックする。今日は入学式の日なのだ。初日はきちんとした格好で気を引き締めたい。

顔を洗って、軽くうがいをして、リビングに向かう。ごはんにふりかけとインスタント味噌汁という、良くも悪くも手軽な日本の朝食だった。

ここでは食事は当番制で行っているのだが、ほとんどの人が料理下手なのだ。よって、たいていはこのような粗末な食事になるのだ。

「紗世ちゃん、早くしないとみんな食べ終わっちゃうわよ。味噌汁はその棚ね」

今日の食事当番である結菜が、箸で木製の棚を指して言う。「行儀が悪いぞ」と夏恵に叱咤されるが、結菜は知らぬ顔で味噌汁を啜すすった。

清水結菜しみずゆいな。総合学科三年生で、アイドル並みの美少女。勿論この人もこの寮の住人で、満とは反対側の隣室を使用している。

「じいちゃん」

丁寧に両手をあわせるのは青山夏恵あおやまなつえ。寮の管理人で美術教師。当然

といえは当然のことだが、美術部の顧問も務めているらしい。ちなみに年齢は不明。

「先生、女の人なのに食べるの早いよ。ここは紗世ちゃんが一人にならないように気を遣わないと」

もぐもぐとご飯を咀嚼しながら竜が言う。言い終えてから、お茶を一気に飲み干した。

縮木竜。童顔に加えて低身長なので小学生にも見えかねないが、真正銘の高校一年生。紗世と同じく普通科一年。

「半分以上は自分のために言ってるんじゃないか？君が朝からご飯三杯も食べるから遅くなるんだ。それと、大人をからかうんじゃない」

「そつだぞ、竜。先生のように反応の薄い人間をからかったって面白くない」

そつ口を挟んだのは、総合学科二年の成瀬東樹。成績優秀で容姿端麗。さらに運動神経も優れていて、まさに絵に描いたような完璧少年である。

「何だか引つ掛かるな」

「別に先生を悪く言ったわけじゃありませんよ」

納得のいかない面持ちのまま、夏恵は食器を洗い場に持って行った。

「寮生活のはじまり」その2

「じゃあさ、逆にからかって面白いのは誰？」

結菜がずいと身を乗り出して訊く。明るい茶色の髪が味噌汁に浸かりそうになり、結菜は慌てて身を引いた。

「先輩でないことは明らかです」

「そんなこと分かってるわよ」

「反応がいいのは竜ですね。すぐ反発するところが子供らしいといつか」

「子供らしいって、東樹と一つしか変わらないじゃん！」

ほらな、とでも言いたげに東樹は勝ち誇った笑みを浮かべた。すっかり東樹にのせられている。

竜と東樹は昔からの友人、いわゆる腐れ縁というやつだ。竜がこの寮に入居したのは東樹の紹介で、実は入居する前からちよくちよく遊びに来ていたらしい。

「悔しかったらもうちよつと大人っぽく振る舞えよ」

そして、腐れ縁なのは満も同じである。同じく東樹の紹介でこの寮に入った満は、これまた同じく寮を遊びに尋ねることが多々あったらしい。

「べーだ。いいもん、いいもん。この方がみんな優しくしてくれるもん」

ぷい、と竜はそっぽを向いた。大人びた振る舞いとは程遠い。

「そうそう。母性本能をくすぐられるっていつか。まあ、ムキになつてる姿を見てるのも可愛いんだけどね」

そう言う結菜は今すぐにでも竜に抱き着きそうな勢いだ。それを分かつての言動なのだから、竜も恐ろしいのである。

「でもさ、からうんだつたらおれより満のほうが面白いと思うよ」「どつという意味だよ」

「言葉通りの意味。小学校五年生のときなんだけどね、道端に」「ちよ、お前それ以上喋つたら絞め殺す！」

「ひどっ！いくら咄嗟にしても絞め殺すはくない？」「お前が古い話持ち出してくるからだろ」

「ああ、あつたな、そんなこと。あれは俺も意外だつたな」「東樹も同調すんじゃない？」

「俺を怒鳴りつけるとは……今日の食事当番は俺だから、久しぶりに豪勢にしようと思つていたんだがな。そうか、お前はいらぬか」「……わるい、間違えた。頼むからその話は出すな」

頼む、と言っている割には、出すな、と命令形である。

それより、話が出た途端に椅子から腰を浮かせるほど人に聞かせたくない話とはどんなものなのだろう。道端に、と言いかけていたが。

「ねえ、それってどんな話なの？」

いつの間にか自分の食器を片づけていた結菜が興味津々に訊く。

「先輩、さっきの話聞いてました？」

呆れたような表情でミツルが問う。

「勿論。でも、途中まで言われたら気になるわよ。ねえ、紗世ちゃん？」

急に話を振られて、紗世は戸惑った。

本音を言えば気になるが、ここで『気になります』と返事をしてはいけないような気がする。

「無理に聞いちゃだめですよ」

結局、苦笑混じりにそう答えた。答えになっているか微妙である。

「紗世ちゃん、優しいわねえ。あんたたちも見習いなさい」

くるりと首を回して、結菜が男三人に視線を向ける。

「その言葉、そっくりそのまま先輩にお返しします」

「なんなら増量してもいいよー」

「むしろ倍増してやる」

東樹、竜、満の順番に言う。それを聞き流すほどのスルースキルを持ち合わせていない結菜は、不機嫌の色を濃くした。

「奴隷の分際で口答えしない」

「あれ、下僕じゃなかった？」

「よくあることだ。いちいち気に留めていたらキリがないぞ」

紗世の独り言に東樹が説明した。自分で言うておいてあれだが、下僕でも奴隷でもどっちでもいい。

「君たち、いつまで喋っているつもりだ？遅刻しても知らないからな。結菜や東樹君はまだしも、新入生たちは入学早々遅刻なんて不名誉を築くんじゃないぞ」

天高は午前中に新入生の入学式があり、午後から全学年で行う始業式があるというちょっと変わったスタイルなのだ。紗世たち一年生には関係のないことだが、入学式の間二・三年生は先生の話をごくだと聞かされるのだという。

夏恵の言葉に反応して、みんなは雑談を打ち切った。

「寮生活のはじまり」その2（後書き）

このメンバー、放っておくといつまでも喋ります（苦笑）。
こういったキャラ同士の絡みも楽しんでいただければ光栄です。

「寮生活のはじまり」その3

学生寮には行事というものがある。これを知ったのは入居初日で、天高に付属するすべての寮で行う行事が約半分を占めるといふ。

残りの半分はこの寮が独自に行っているもので、季節の行事にちなんだものが主だそうだ。ちなみに、その主催者は決まって結菜で、無駄に準備に気合が入っているのだという。

そんな寮から天高までの距離は徒歩十分。他の生徒よりもゆっくりとした朝を過ごせるのだ。

そんな優越感に浸りながら、紗世たちは通学路を歩いている。容姿に優れた人物が多いからか、やけに人目を集める。その視線が自分に向けられているものでないことは承知しているので、紗世にとっては苦痛でしかない（自分に向けられたものだとしても心地よくはないが）。

そんなことにはもう慣れきっているのか、誰も気にする様子を見せない。自分が気にしすぎなのだろうか。

「じゃ、またね」

結菜と東樹は校舎の方へ向かう。紗世たち新入生は体育館前のクラス割から自分のクラスと出席番号を確認し、その教室に行かなければならないのだ。

「うわ、人多いな」

「見えないよー」

満が顔を歪め、竜は何とかクラス割の一覧表を見ようとつぎのよつに飛び跳ねている。紗世も背伸びをしてみるが、内容はよく見えない。どうしてみんな、こんな場所に長く滞在するのだろうか。自分

のクラスと出席番号をチェックしたらそれで用済みなのに。

「おい竜。お前、人ごみすり抜けてオレたちのクラスと出席番号見てこい」

「えー。すり抜けるって言ったってそんな楽じゃないよ」

「いいから行ってこい。今晚、ハンバーグ半分わけてやるから」

「今日の晩ご飯ハンバーグなの？」

好物なのか、竜の瞳が無邪気に輝く。

「ンなもん知るか。出たらの話だよ」

「さらっと人のこと騙そうとしないでよ！ていうか、おれは餌付けなんかされないもんね」

「されそうになつてただろ」

「あれは演技だもーん」

「演技する意味あったか？」

そんなやりとりをしている間に、人ごみの中に小さな隙間ができた。子供一人がギリギリ通れそうな、僅かな隙間だ。

「開いたみたい」

隙間が閉じないうちにと、紗世は短く言って空間を指した。

「よし、今のうちにとつと行って来い！」

言うが早いか、満は竜の背中を勢いよく押した。わわっ、と竜はバランスを崩してこけそうになる。

「もう、人使いが荒いんだから！」

文句をいいつつも、竜は人ごみの中へ。小さな体を利用して、上手く人と人との間を通っている。

何分か経ったと思うが、竜は一向に戻ってこない。竜の頭は他の人より低い位置にあるので、その場所を確認することすらできないのだ。

「遅い」

満が呟く。紗世も同調して頷いた。

三人分のクラスと出席番号を確認するだけだから、そんなに時間はかからないはず。

何もせずただ立ち尽くしていると、色々と頭が働いてしまう。高校生活が始まることへの不安、慣れてきてはいるものの、まだまだ馴染みきれない寮生活。加えて天高のハイレベルな授業についていくかという心配もある。

「入学初日から何悩んでんだよ」

考えていることを見透かされて、紗世はびくつとする。

「悩んでない」

何悩んでるの、と訊かれると紗世はほとんど反射的にそう返す。普段あまりハキハキした物言いはしないのだが、これだけは間髪入れずに強く返すのだ。

「嘘つけ。新一年生ってのは大抵期待と不安の両方が込み上げてきたような顔してるけど、今のお前には不安しかない」

「……」

その通りすぎて、返す言葉がない。
そもそも『学校』という環境が好きになれないのだ。それなのに新しく通うことになった高校に期待なんて見出せない。
この学校を受験したのは、学業に優れた学校ならコミュニケーションの機会が少ないと思ったからだ。優秀な学校は勉強、勉強で遊ぶ暇もない。ようはそんな偏見を持っていたのだ。

「何で分かるの」

そう言った紗世の声は小さかった。

「さつきも言っただろ、顔に出てるんだよ。悩んでないって意地張るくらいなら顔に出すな」

そんなことを言われても、顔に出してしまうのだから仕方がない。気をつけたところでどうこうなる問題ではないのだ。

自分の感情が表情に出やすいことは自覚している。それでかろうじて誤解を招かずに済んでいることもあれば、そのせいで人から嫌われることもある。

黙り込んでいると、視界の端で満開の桜が風に揺らされた。花びらが散って、地面にひらひらと舞い落ちる。

そう言えば、明日は寮のみんなで花見をやると結菜が行っていた。花見そのものは好きだが、人が多いのは好きではない。両親はそれを考慮して毎年穴場スポットに行ってくれたが、寮から行くには少し遠い。知る限り近くの公園が一番満開だったが、おそらく人は多いだろう。

そんなことを考えていると、竜が人ごみを掻き分けて出てきた。

「おせえよ、何分かかってんだ」

「いやあ、女の子にいじられちゃって」

えへへ、と竜は笑った。結菜も行っていた通り、その容姿も言動も母性本能をくすぐるのだ。それについて否定はしない。

「で、どうだった？」

満が先を促す。

「残念ながら、みんな見事にバラバラです」

竜はおどけてみせた。

そこで紗世は、自分がどこかほっとしていることに気づいた。

クラスに馴染みきれないのは毎年のことだった。そんなみつともない姿を、二人に見られたくないのだ。

そして、紗世は竜からクラスと出席番号を聞いた。

「寮生活のはじまり」その4

入学式。一年二組の列に並んで、紗世は先生の話聞いていた。

正直、校長先生の話はつまらなかった。高校生としての自覚がどうだとか、先輩に頼り切りではいけないだとか、中学の入学式でも似たような話を聞いた覚えがある。

隣の男子生徒が欠伸をかみ殺している。退屈なのはみんな同じようだ。

生徒会長の挨拶も実に平凡で、特に感動的でもないシナリオを、若干強弱をつけて読み上げているようだった。強いて言うなら、生徒会長が女子ということが物珍しいくらいだ。

「湊川紗世。相吹中出身です。……一年間、よろしくおねがいします」

教室に入ってから、あいいうえお順に自己紹介をした。気の利いた自己紹介ができない紗世は、月並みなことしか言えないのだった。

初日の自己紹介からギャグをとばす生徒もいた。クラスに一人はいるものだな、と思う。

「ねえ、湊川さんは趣味とかある？」

休み時間、後ろの席の女子生徒が声をかけてきた。ギリギリ肩につき程度の髪に、ぴよこんとはねたアホ毛が特徴的だ。

「趣味は、読書です」

「読書って、漫画じゃないよね？」

紗世は頷いて、「でも、漫画も」と続けようとする。

「すごいなあ、わたしなんて読書感想文書くときくらいしか本読まないのに」

女子生徒は、あはは、と笑う。

声が大きく、こちらのお話を無視して一方的に話を進める。苦手なタイプだな、と思った。

「わたしはギターやってるんだ。だから、この学校でも軽音部に入ろうかと思つて。湊川さん、バンドとかどう？」

「いや、私は……」

「なんだ、やらないのか。それでね」

そこから、女子生徒はギターやらベースやらの話を続けた。相手と会話をするというより、ただ自分が話したいだけのようだ。

次の休み時間、紗世の後ろの席の女子生徒は別の生徒と話していた。

「それでさ、話してて嫌そうな顔すんの。ウザいと思わない？」

それが誰のことかは考えるまでもなかった。

ああ、また失敗した。

満開の桜を見上げて、紗世は校門をくぐる。

桜の満開は短い。いとこの聡史はその意味を理解しなかったが、紗世は心から同意した。もうすぐ満開だと思つていると、桜はすぐに雨風で散つてしまう。綺麗に咲いていると思つたら、その瞬間こそがまさに満開なのだ。

徒歩十分の距離は通学としてはとても便利で、比較対象として中学時代の自転車三十分の登下校を思い出した。夏場は汗だくになった

ものだ。

学校が終わってすぐ教室を出たので、帰っても誰もいないかもしれない。そう思っただけだが、さすがに鍵が開いていないとは予想外だった。

管理人である夏恵はきつとまだ学校なので、鍵を持っているとしたら最上級生の結菜だろう。結菜が帰ってくるまで、寮の前で待っているしかなさそうだ。

静かな場所に一人でいるのは久しぶりだ。春風が気持ちよく感じる。やはり、自分にはこういう静寂のほうが性に合っているのだ。人と話すより本を読んでいるほうが好きで、大勢で騒ぐより一人で風に吹かれているほうが落ち着くのだ。

「開いてないの？」

竜が帰ってきた。束の間の静寂だったな、と紗世は内心脱力して頷いた。

紗世の隣に並んで、竜は扉に背を預けた。こうして並んでみると、本当に高校生に見えない。紗世より背が低いのだ。

「……」

静かな空気は好きだが、隣に人がいて無言で佇んでいるという気まぐさは例外だ。

とはいえ、紗世が何か気の利いた話を切り出せるはずがない。そもそも何を話したらいいのかなんて分からないし。

「先生も、こうならないように何か手を考えてくれればよかったの
にね」

急に言われて、すぐには反応できなかった。

「そ、そうね……」

咄嗟に同意したけれど、内心は先生も忙しいのだろうと思っていた。今更返事を取り消すのも面倒なので黙っておくが。

「ああでも、もしかしたらうつかりしてたのかも。先生あれでドジっ子だから」

言って、竜は軽く笑う。

ドジっ子？

紗世の知る夏恵からはまったく結びつかない言葉だ。

「紗世ちゃんには分からないかな？ そうだ、先生が帰ってきたら見せてあげようか？」

「……見せる？」

どうやって。

「いいから楽しみにしててよ。面白いが驚くかのどっちかだと思うから」

竜は企み顔でにまにまと笑っている。そこまで言われると、紗世も少し気になってきた。

ふと視線を横に向けると、そこには寮の駐車場がある。駐車場といっても、元々車をとめるための場所ではなさそうだ。空いているスペースに車を駐車している、というふうに見える。

「……って、あの車」

どうして今まで気づかなかったのだろう。あれは、先生の車ではないか。

「先生もう帰ってるってこと？」

言いながら、竜は玄関の扉を開けようとする。

「でも、玄関あいてないよ」

紗世は首を傾げた。

車がここにあるのに家にいないということは、一度ここに帰ってきてから徒歩でどこかに行ったとしか考えられない。この辺りはそこまで田舎ではないので、コンビニに行くのだとしたら学校に行くより時間はかからない。

「すぐ帰ってくるよ」

そう言って、再び扉に背中を預けた。それにしても、満と東樹、結菜の帰りが遅い。授業が終わる時間はどのクラス、学年もほぼ同じだから、もう帰ってきてもいい頃なのに。

「寮生活のはじまり」その5

ちやうどそう思っていると、満が帰ってきた。学校とは反対方向の道から。

「おかえりー。遅かったね」と竜。

「明日の食事当番はオレだからな。その買い物」

満は買い物袋を顔の高さまで上げてみせた。

「おれの好きなお菓子買ってきてくれた？」

「買ってない」

「気が利かないなあ」

「お前に気を利かせる必要なんてどこにもねえからな」

で、そんなところで何してんだ？と満は素朴な疑問を口にする。それに答えたのは竜だ。

竜は、寮の鍵が開いていないことを説明した。夏恵の車を指差し、

「もうすぐ帰ってくるんじゃない？」とも。

「ところで、その中何が入ってるの？」

竜が満の持っているレジ袋を見つめて訊く。

「カップ麺」

またか、と紗世は自分の料理スキルを棚に上げて思った。

「それでも、今回はいつもより豪華だぜ」

満は「ごそごそと袋を漁り、それを取り出すと自慢げに見せた。

「チャーシュー大盛り、こだわりの職人ラーメン」

……それでも、結局はインスタントラーメンの域を出ないのだ。

「それって新しく発売したやつだよな？」

だが、思いのほか竜は瞳を輝かせた。

それでいいの？

ここのところ、カップラーメンを中心にインスタント食品が多かったなとは思っていたが、どうやら本当にそれが普通のようだ。

料理ができないことに引け目を感じなくてすみそうだと安堵すべきか、これからインスタント食品が続くのだと辟易すべきか、微妙だった。

「あ、お前またカップ麺かって思ってるだろ」

満に言われて、紗世はぎくっとする。

「だからどうして分かるの」

「お前は顔に出やすいんだって言っただろ。文句があるなら食わなくっていい」

「ていうか、この状況だと普通なら不満に思うよね」

竜の言葉に頷きそうになって、ためらった。本気でおかずがなくなつては洒落にならない。

「不幸なことに、この寮には料理のできないやつばっか集まりやが

つたんだ。東樹がいなきや、オレた

ち手料理の味を忘れるところだったな……てか、東樹がいなきやオレも竜もこの寮にいないのか」

「でもさ、新しく女の子も入居してきたんだし。期待できるかもよ？」

もしかしくなくても、竜の言う『女の子』というのは紗世のことだろう。二人の大きな瞳が、期待の眼差しを向けてくる。紗世にとって、その視線は痛いだけだ。

「……ごめんなさい」

たとえ料理下手な人がほとんどの中でも、引け目を感じないことはなさそうだ。

紗世が謝り終わるとほぼ同時に、カシヤン、と音がした。

反射的に振り返ってみると、そこには東樹がいた。家の中から鍵を開けたのだ。

「帰ってたの？」

「ああ。お前たちが帰ってくる前に」

竜の問いに、東樹は何食わぬ顔で答えた。

「だったら鍵くらい開けるよ」

満の言葉に内心で同意する。紗世たちが待っていることに気づいていたのなら、鍵を開けるくらいのこととはしてくれてもいいのに。

「悪かったな」

微塵も悪かったかと思っていなきさそうな口調は納得いかないが、ようやく寮に入れると思うと怒りはなかった。

寮に入ると、結菜も夏恵も帰っていた。どうして鍵を閉めていたのか疑問に思うところだが、竜がすでに文句を垂れているので役目は任せることにした。

自室に戻って、読みかけの本を読んでしまう。寮に来る前はパソコンひとつでずいぶんと時間が潰せたものだが、生憎パソコンは家においてきてある。家族兼用だから、自分が持ち出すわけにはいかなかった。

部屋にこもっていると今まで以上に暇なのに、部屋から一歩でただけでうるさいほど賑やかな空間が広がっている。妙な感覚だ。

「寮生活のはじまり」その6

帰って来たときに鍵が開いてない理由は、午後三時に分かった。

「おやつ時間よ！」とノックもなく部屋に入ってきた結菜連れられてリビングに行くと、テーブルの上にはケーキがあった。パーティー用の大きなチョコレートケーキだ。

「誰かの誕生日？」

紗世の呟きに、「いいえ」と結菜が楽しそうに首を横に振った。

「おー！」

無邪気な声に振り返ると、東樹に連れられた満と竜がいた。それより意外だったのは、今の無邪気な声が二人分だということだ。

「ねえ、こんなのいつの間にも用意してたの？」

興奮気味の竜が、ケーキに視線を向けたまま問う。

「授業が終わるなり教室を飛び出して、大急ぎで買って来たんだ。ケーキの箱を提げているところでお

前たちに出くわしたら困るから、裏口から入った」

東樹の答えに紗世は、それで玄関の鍵が閉まっていたのか、と納得する。

「それらの一連の行動はすべてあたしがやったことよ。自分の手柄みたいに言っんじゃないわよ」

「先輩、俺は『俺がそうした』なんて一度も言ってますんよ?」

「子供みたいな言い訳ね」結菜が呆れた様子で言う。

「そんなことを気にする結菜も子供っぽく見えるぞ」

いつの間にか、夏恵が結菜の側に立っていた。さっきまでどこにいたのだろうか。

「あたしを子供扱いするとはいい度胸じゃない。今度あたしが食事当番のとき、あんたたちのご飯作ってあげないんだから!」

「カップ麺くらい、わざわざ作ってもらうまでもねえよ」

「そこ、何か言った?」

ボソツと呟いた満に、結菜が機敏に反応した。

「ねー、それより早くケーキ食べようよ!美味しそうなおケーキが目の前にあるのに食べられないなんて、おあずけされてるみたいじゃん」

よほどケーキが楽しみなのか、竜がいつの間にか椅子に座っていた。こうして見ると、お誕生日ケーキを待ちわびていた小学生以外の何者にも見えない。本人には言わないほうがいいだろうけど。

「おもしろいな、それ。ほれ、お手」満が面白そうに竜に手を差し出す。

「むー。子供扱いならまだしも、犬扱い?」

「ちゃんとできたら、オレの分のケーキ半分分けてやる」

「……!わ」

「君はケーキ半切れのためにプライドを捨てられるのか」

夏恵の呆れたようなツツコミに、竜はハツとして伸ばしかけていた

手を引つ込めた。本気で『お手』するつもりだったのか。

「ち、違うよ！あれは、その……一種の気の迷いってやつだよ！」

「それでも十分問題あるだろ」と東樹。

「もう、みんなして！こうなったら満の分も東樹の分もケーキ全部食べちゃうもんねーだ！」

「俺はそれでも構わないが、今晚のお前のおかずは『にぼしだけ味噌汁』にランクダウンすることになるぞ」

「だしオンリー！？レトルトよりひどい！」

食権利を利用した東樹の罰に竜が叫んだ。

「……この寮だけ、大阪の街の中みたい」

紗世はみんなに聞こえないように小さく呟いた。

こういった騒がしい空気は苦手。でも、教室の隅で一人本を読んでいるよりは幾分マシだ。

一人の場所は好きだけど、たくさん人がいるのに一人でいる場所は嫌い。

呟くのと同時に、あることに気がついた。

「ケーキは？」

テーブルの上にあったはずのケーキがないのだ。

「え？」

満と竜の声が重なり、二人ともが大きな瞳を丸くする。

辺りを見渡してみるが、ケーキはどこにも見当たらない。ケーキ消失事件、という何かのサブタイトルのようなものが脳裏をよぎった。

「あそこ」

東樹が無表情でキッチンの方を指差した。見てみると、等分された
ケーキが小皿に盛りつけされている最中だった。どうやらみんなが
駄弁っている間に準備を進めてくれていたようだ。

「寮生活のはじまり」その7

「みんなー、飲み物は何がいい？」

夏恵がケーキを小皿においている一方で、結菜が冷蔵庫に視線を向けたまま訊く。

「ちなみにあたしはサイダーよろしく」

「よろしくって、自分でいれないのかよ」

「あたしが雑用なんてするわけないでしょ」

口を挟んだ満に、結菜は当然のごとく返して冷蔵庫を閉めた。

「飲み物の種類は無駄に豊富だから、大抵のものはあるわ」

「君の我が儘の結果だろう。それを無駄にとはなんだ」

「いちいちうるさいわね。おかげで気分次第に何でも飲めるんだからいいことじゃない」

「そういう問題でもないだろう……」

これ以上言っても無駄だと諦めたのか、「私は紅茶にする」と言いながら夏恵は棚からティーバックの袋を出した。

「オレ、コーラ」と満。

「俺はコーヒー。砂糖一つ」東樹も続く。

「オレンジジュース！」元気よく竜が言った。

「私は、いちごミルク」

あるのだろうか、と思いながらも紗世は最後にリクエストする。

「全員バラバラじゃないか。……というか、それは私がいれるのか？」

紅茶のティーバックを浸しながら、夏恵が相変わらずのポーカーフ
エイズで呟く。台詞だけ聞くと面倒そうだが、無表情なのでさほど
嫌がっているように見えない。

「私、手伝いましょうか？」

こういった人の手伝いを積極的に買って出るような性分ではないの
だが、他の人の飲み物を準備している間に紅茶が冷めてはいけな
いと思いい、控えめに言った。

「紗世さんはいい、座っていてくれ。これは君たち一年生の歓迎会
なんだから」

「はあ……え？」

私たちの、歓迎会？

「ていうか今の、地味に先生に準備しろって言ってるよな」

「そんなんつもりは……それより、私たちの歓迎会って？」

人の揚げ足を取った東樹に反論しかけて、紗世は疑問を口にした。
誰にともなく訊いたのだが、「あれ？言っただけ？」と結菜
が目を丸くした。

表情の読み辛い二人以外　満と竜も『聞いてなかったの？』とで
も言いたげな顔をした。知らなかったのは自分だけだったのか。

「大方、問答無用で連れ出されたんだろうな」

夏恵の言葉に、紗世は首肯した。結菜は悪びれる様子もなく「まあ、サプライズってことで」と笑っている。別に怒りはしないからいいのだけれど。

ケーキが運ばれてから一口目を食べるまで、実に時間が掛かった。一番大きなものを早々に竜が取り、満がそれに文句を言う。結菜はただ竜を見て「可愛い」と言うだけで仲裁しようとしないうし、夏恵は呆れて紅茶を啜っている。東樹に至っては「男なら勝負で白黒つけたらどうだ」とはやしたてる始末。自分はちゃっかりケーキを一切れ確保しているし……実は楽しんでいないだろうか。何かとアイコ続きのじゃんけん勝負に決着がついて、大きい方を獲得した満がようやくフォークを手を取った。ケーキひとつ食べるのに、どうしてここまで時間がかかるのだろうか。

「……………」

「……………何だよ」

視線に気づいたらしく、満が不満そうに紗世を見る。ムツとした表情が、何だか拗ねた子供みたいだ。

「何でもない」

「何でもないはないだろ」

「何でもないの」

「何でもないくない」

「お前ら、何安っぽいドラマみたいなことやってるんだ？」

話が進まない口論をしていると、東樹が口を挟んできた。やはり、わずかだがその声は楽しそうだ。

「気持ちには分かるが、『ケーキが好きだなんて可愛い一面があるとは意外だ』なんて言うなよ。『可愛いのは見た目だけじゃなかったんだ』とか言ったら、本人色んな意味で怒るからな」
「もう怒ってるよ！お前が言っちゃいけないことをペラペラ喋ったからな」

「前々から思っていたのだが、東樹君やけに楽しそうだな」

夏恵の言葉に、東樹は「そんなことありませんよ」余裕で流した。

「そういえば、今日の晩ご飯は豪勢にするって言ってたけど、何するの？」と竜。

「お前、よくケーキ食いながら夕飯の話なんかできるな……」と満。

「おれはアレだから。えーと……大食缶？」

「給食か！大食漢だろ」

「そうそう、それ。で、どうなの？」

「残念ながら、特別豪勢ではない。安心しろ。レトルトでないことだけは保証する」

「えー。豪勢にするって言ってたのにー」

ぷうつ、と竜は頬を膨らませた。かと思えば、ケーキを一口食べる
と嬉しそう顔がほころんだ。表情がコロコロ変わる。

「その代り、明日の昼は俺が担当する」

「やったー！」

「……そのバンザイは、オレに対する挑戦ってことでいいな？」

大袈裟すぎるほど喜ぶ竜を、明日の食事当番である満が睨みつける。

「ところで東樹、何で明日のお昼だけ？」

「誤魔化すの下手だな、お前！」

「明日はお花見に行くって言ったでしょ？もう忘れたの？」

サイダーを飲み干して結菜が言う。すっかり忘れていたらしく、竜は「忘れてた」と正直に口にした。昼を東樹が担当するということは、花見の弁当を作るということだ。

「今度こそ豪勢にしてよね。おれも手伝うから」

「そうだな。じゃあお前は弁当にひたすらバランスを差し込んでくれ」

「やだよ、そんな雑用！せめておかずの盛り付けとかさせて！？」

「もしくは肉団子にピックを刺すかだ」

「大して変わらないよ！嫌だからね？黙々とピック刺すの」

「ああ、あつたぞ。すごく役立つ仕事が」

「ほんと！？」

ずい、と竜が嬉しそうに身を乗り出す。絶対ろくな仕事じゃないな、と紗世は予想する。

「おにぎり用のノリが余るかもしれないんだ。処分してくれ」

「邪魔なら邪魔って言って！？これ以上言われたらいくらおれでもへコムからね！？」

頼むから花見に行つて周りの人間に迷惑かけるなよ、と夏恵が溜め息交じりに言った。

お花見って言ったらドンチャン騒ぎがお約束じゃない！という結菜の元気な返答に、夏恵はますます深く溜め息をついた。

「お花見ワンデー」その1

時計を見ると、二本の針は九時半を示していた。目覚ましを掛けたわけでもないのに三十分ジャストに目覚めたと喜んでいる場合ではない。何故なら、今日は花見に行く予定だからである。

こういう場合は大抵隣室の満が起こしに来るのだが、どういうわけか今日はモーニングコールがない。今日こそ寝坊してはいけない日だろうに。

「……」

着替えてリビングに出てみると、その理由が分かった。

「ねえ、飲み物ってこれだけでいい？」

「結菜、どうして酒が入っている？」

「ん？だって、お花見といえばお酒でしょ？」

「君はサラリーマンか。というか、それは私の晩酌用の酒ではないか」

「ノープロブレムよ」

「ノーはいらない、プロブレムだ。そもそも、君は未成年じゃないか」

「お花見のときくらい無礼講よ」

「どういう理屈か知らんが、法律は守れ」

おそらく準備の最中なのだろう。大きなバックを覗き込んで、夏恵が僅かに顔をしかめている。

「ねえ、こっちも持つていく？」

「もう適当に詰め込んでりゃいいんじゃないかね？お菓子なんていくら入

れてもそんな重くなんねえだろうし」

「ようし、じゃあれも入れちゃえー！」

「って、ちよつと待て。バナナ一房はいくらなんでも多いだろ」

「バナナはおやつだよな？」

「そういう問題じゃねえよ！バナナがおやつだろうがおかずだろうがどっちでもいいっての」

「どっちでもよくないもん」

「何でそこに食いつく？」

「じゃあ満、バナナをおかずにご飯食べられる？無理でしょ？じゃあやつぱおやつなんだよ」

「だからどっちでもいいって」

「どっちでもよくないもん。満はバナナをおかずにご飯食べられるの？」

「それはさつき聞いたよ！何回繰り返す気だ、このくんだり」

満と竜は花見に持っていくお菓子を用意している。何だか話がズレている気もするが。

キッチンを一瞥すると、案の定東樹が弁当の準備をしていた。洗面所に言って歯磨きと顔洗いを済ませてから覗いてみると、昨日の宣言通り豪華だった。

「つまり、私を起こす暇がなかったのね……」

「お、起きてたのか」

紗世の存在に今気づいたらしく、東樹は振り返った。自分はそんなに影が薄いのかと凹みそうになるが、東樹の集中力がすごいのだと思うことにしよう。そうに決まっている。

「仕事ならないぞ」

「分かっています」

というか、弁当はもうほとんど完成している。紗世が料理下手であるうとそうでなからうと、手伝いは不要だったと思う。

「暇なら菓子選びにでも付き合ってやれ」

「お菓子選びを？」

紗世は棚を漁っている満と竜に目をやった。棚の奥から引っ掻きだしているのか、二人の周囲にはお菓子が散乱している。

二人の元に行ってみたのはいいものの、手伝うことなどなさそうだった。それに、お菓子を選ぶのに三人も必要ない。

「お、奥に何かあるぞ……何だこれ」

菓子袋を取り出した満が、それを見て顔をしかめた。賞味期限切れのお菓子でも眠っていたのだろうか。

「どうかした？」

「何か、変なモン出しちゃった」

「変なもの？」

紗世と竜の声が揃った。これ、と満がそれを見せてくる。

「スリッパン」

「ほんとに変なもの出た！え、何これ。スリッパの形したパン？」
と竜。

また悪趣味な。スリッパの形の食べ物を食べたいとは思えない。誰がこんなものを買ったのだ。というか、どこのメーカーが売り出しているのだ。

「あ、それ買ったのあたし」
「君はまた変なものを……」

また、と言われているあたり結菜はよく変わったものを買う傾向があるようだ。それにしてもこれはどうだろう。

「スリッパの足を入れるところにジャムやチョコレートを入れてお楽しみください。だってよ」

「何その食欲の萎える説明文！食べないよ？おれ絶対食べないからね？」

「私もいや」

「じゃあやつば買ったヤツが食うのが一番じゃね？」

言いながら、満は結菜に視線を向けた。考えるまでもなく「食べ」と視線で語っている。

「今の説明文であたしの食欲も萎えちゃったから、先生にパスするわ」

「自分で買ったんだろう？責任持って君が食べるんだ」

「東樹くん」

結菜に呼ばれて、東樹がやって来た。ちょうど区切りがついたのか、もしくは弁当が完成したのか、呼んでから五秒も経たない間に顔を出してきた。

「何ですか？」

「あれ、食べる？」結菜が指を差した。

「あれ？」

「スリッパン」

「……商品名からして嫌な予感しかしないので、竜にパスだ」

「だから食べないってば！満が見つけたんだから、満食べなよ」

「何でオレが。もう捨てようぜ？どうせ誰も食いそうにねえし」

さすがに誰も食べたくないようで、満がゴミ箱にスリッパンを捨てても文句を言う者はいなかった。

「お花見ワンデー」その2

「な、何よこれは……」

花見会場に到着した一行。その開口一番、紗世が唸るように言った。

「満開だねー！」

数日前テレビで紹介されたお花見スポットの桜に、竜は無邪気な笑みを浮かべた。

「同時に満員だな」

それに水を差したのは東樹だ。

さすがはテレビの力、といったところだろうか。『この春押さえておきたいお花見スポット、県内ナンバー1』として宣伝された効果はバツチリで、お花見をしにきた人たちがいっぱいになっている。頑張つて探せばレジャーシート一枚敷くくらいスペースはあるのかもしれないが、人の熱気というものが苦手な紗世としては謹んで遠慮したい。

「あたしとしたことが、しくじったわ。昨夜から泊りがけで場所を確保させればよかった……！」

満開の桜を見上げて、結菜が心底悔しそうに眉をひそめる。確保させれば、ということは自分で場所を確保する気はさらさらないようだ。

「その役、まさかオレに回ってこないだろうな？」満が嫌そうに言

う。

「消去法で言つて、その確率が高いな」と東樹。

「窮屈でよければ場所を探すが……」

控えめな夏恵の提案に、紗世は「別の場所をあたりましよう！」と珍しく八キ八キと発言した。紗世のはつきりとした物言いがあまりにも珍しかったのか、夏恵は「そ、そうだな」と驚き顔のまま同意した。

「探したところで、いい場所なんてなさそうだもんね」

結菜は溜め息交じりに言い、肩を竦めた。

今日はことごとく不運な日なのか、どこに行つても人が溢れていた。もう何か所回つただろう。もはや歩きつかれてしまい、紗世は内心帰りたいと連呼する始末。結菜に至っては、「もう桜の木をちよんぎつて、寮の庭でお花見したいくらいだわ」などと言い出した。さすがに冗談なのだろうが、結菜なら本気でやつてのけそつで怖い。

「ここにデジカメがあるのだが、これで桜を撮影して花見ということにするか？」

「絶対やだ！」

やはり夏恵も歩きつかれたらしく、らしくないほどおかしなことを言いだした。それに対して、竜が声を張り上げる。どこにそんな元気があつたのだろう。

「お前ら、体力ないな」

満は同じくケロツとした様子だ。

「女は男より体力がないからだろうな」と東樹も平気そうだ。

「でも、どうする？もうどこも人がいっぱいだよ」

「夜なら人もいなさそうじゃない？」

少し元気を取り戻した結菜が言う。夜の花見　夜桜ということか。夜桜かあ、と竜が結菜の言葉に瞳を輝かせる。しかしそれも束の間だ。だめだ、と夏恵が一蹴したのだ。

「えー」

竜と結菜の声が揃った。

「何でさ、先生のバカ！」

「そうよ、堅物頭」

よほど夜桜がしたかったのか、竜と結菜は教師に向かって口々に罵声を浴びせた。夜桜が却下されたくらいでそこまで言わなくても。

「君たち、自分が子供だと忘れてないか？夜の外出は許可できない」

「保護者同伴ならいいでしょ？先生がついて来れば万事オツケーだわ」

「私は行かないからな」

夏恵は腕組みをしてまで頑なに断った。やはり教師として、生徒に夜遊びのようなことをさせるわけにはいかないのだろう。

「もうお花見は諦めよう？お弁当は普通におかずにするばいいんだ

し」

耐えかねた紗世はそう提案した。これ以上歩き回るのは嫌だし、花見自体もそれほどしたかったわけではない。次の場所も、どうせ満員だろうし。

「そうだな、俺も腹が減ってきた。場所が見つかったから食べていたら、昼食どころか三時のおやつになりそうだ」

「オレも賛成」

「私もだ」

賛成しなかった二人が文句を垂れるかと思ったが、「仕方ないわね」と結菜は納得した。ただ、竜だけは不満そうな表情だった。

「お花見ワンデー」その3

せっかく豪華なお弁当なんだからお昼じゃなくて晩ご飯に食べましよう、という結菜の提案が採用され、その日の昼食は豪華な弁当からコンビニのサンドイッチに大幅レベルダウンした。

寮に帰って読書にふけていると、携帯がメールの受信を知らせた。珍しいな、と思いながら紗世はメールを見た。結菜からだ。歓迎会のとき、携帯番号を交換しようと言われたのだ。

件名：初メール！

本文：今日の晩ご飯んだけど、食欲ないとか言っであんまり食べないで

これはお願いじゃなくて命令よ

イジメじゃないから、安心しなさい

訳が分からない。そもそも同じ建物の中にいるのにわざわざメールで伝える必要があるのだろうか。それに、どうしてそんなことを言うてくるのかも理解不能だ。文面が問答無用なのは結菜の性格上仕方ないことなので、そこに関しては気にならないのだけれど。不審に思いつつも、了解という件名で返信した。

夕食時。テーブルの上には、昼間の弁当が広がっている。

「何だ、みんな箸が進んでないな」

あまり食が進まない紗世たちの様子を見て、夏恵が不思議そうに言

う。実際、不思議に思っているのは夏恵だけではない。他の人たちは知らないが、紗世は不思議に思っている。

食を抑えているのは紗世だけではない。結菜は勿論、男子寮生三人も同じく指しが進んでいないのだ。

偶然　とは考え難い。結菜が同じ内容のメールを送った、と考えるのが妥当だろう。

そんなことを考えているとまた顔にでそうなのでなるべく無心でいようとしますが、黙々と箸を進め続けるわけにもいかない。となるとやはり脳が働きたがるのだ。

「昼が少なかったから、てっきりもつと食べるかと思ったんだが」

そういう夏恵は空腹だったらしく、もうご飯を三杯も食べている。

「全員食欲がないというのも珍しいが、竜君がおかわりもしないということが何より珍しい」

「それは……実はさっき、お菓子食べちゃって……」

竜はバツが悪そうに視線を逸らしながら答える。挙動不審なのは嘘をついているからなのか、間食をしたことの後ろめたさからなのか、どちらとも判別できない。

「そういえば、花見用に準備していたお菓子がごっそりなくなっていたな。まさかとは思うが、あれを

全部食べたのか？」

「え、その……」

「自称大食缶も、あれを全部食べれば満腹になるだろうな」

「人の間違いを掘り返さないでよ！ た・い・しょ・く・か・ん。もう覚えたもんね」

東樹の意地悪な台詞で話があやふやになったように思える。もしかして、実はあれがフオローだったのだろうか。少なからず、竜は気づいていなさそうだけど。

「高校一年生が大食漢って覚えたくらいで威張るな」

「ほんつと満は言うことがキツイんだから。たまには優しくしてくれたっていいのに」

「例えば？」

「さっきのとも、『よく覚えたねー。えらい、えらいー』って褒めるとか」

「芸を覚えた犬みたいだな」

「あつ、今のナシ！じゃあね……結菜先輩みたいに『可愛いー』って言うとか」

「気持ちわりいからヤダ」

「じゃあ『君はやればできる子だ』」

「どんなシチュエーションだよ！つか、誰だよそれ」

この光景も見慣れたものだ。この寮に入ってわずか数日で『見慣れた』と思えるほど、この二人の喧嘩と漫才を足したようなやりとりは多発している。

「紗世さんも食欲がないようだが」

まさか自分に矛先が向くとは思っていなかったもので、紗世は思わず肩を揺らした。

「そんなに驚かなくても」

「すみません。ボーツとしてたもので……」

ボーツとしていたというのもあながち嘘ではない。しかし、どうし

ても言い訳をしているように感じてしまう。

「実は、私も間食しちゃって……」

「紗世さんもか」夏恵は呆れたように肩を竦める。「君たち、ひよつとして私に内緒でケーキバイキングにでも行ったのか？」

「さつきお花見用のお菓子食べたって言ったじゃない」

お茶を飲み干して、結菜が口を挟む。お茶なら何杯飲んでもいいのか、今飲み干したのが二杯目だ。

「冗談に決まっているだろう」

「先生ポーカークフェイスだから、冗談に聞こえないのよ」
「確かに」

「東樹君の場合、冗談と本気の区別がつかないけどね」

「先輩も人のこと言えないと思いますよ」

「あたしはいつだって本気よ」

最悪の返答だ、と思う。全部冗談だと言ってくればどれほど嬉しかっただろう。そんなことはありえないと分かっているが。

「お花見ワンデー」その4

「先生、ストップ。捨てちゃだめよ」

残った弁当に蓋をして捨てようとする夏恵の動きを、結菜が手で制止した。

「何故だ？弁当は翌朝まで持たないぞ」

「あたしが捨てておくから、先生は部屋に戻ってていいわ」

紗世は耳を疑った。結菜が自ら雑用を買って出るなんて。

考えていることは皆同じだったようで、夏恵を含め、全員が顔を見合わせた。東樹以外の全員が目丸くしている（夏恵も僅かに驚き顔になっている）。

「結菜、何か悪いものでも食べたのか」

「まさかスリッパン!？」

「いや、スリッパンは一応普通のパンだろ。毒キノコ拾ったとか」

夏恵、竜、満が口々に真顔で問う。そんな三人（もしかしたら紗世も同じような表情だったかもしれない）の様子に、結菜は器用に片眉を吊り上げた。

「あたしが捨ててきてあげるって言うてるのよ？大人しくあたしの優しさに甘えるがいいのよ」

その割には優しさの欠片も見受けられない上から目線だが、下から目線の結菜はもはや別人になりそうなので気に留めないことにしよう。

「じゃあ、お願いします」

こう言えば手っ取り早いだろうと、これまで黙っていた紗世が口を開いた。

「そうそう、紗世ちゃんはイイ子ね。みんなもそう言えばいいのよ。アイドルのような笑顔のまま、結菜は「そういうわけで、先生は部屋でゆつくりしてて」と夏恵の背中を強引に押してリビングから追出した。何もそこまでしなくても。

「さてみんな、今から脱走計画の説明をするわ」

先生を追い出すと、結菜は表情も声音もシリアスなものに一変させた。

「脱走計画!？」

予想外にも程がある単語に、紗世は珍しく大声を上げた。

「しーっ。先生に聞こえたらそうすんの」

「い、ごめんなさい」

結菜にたしなめられ、紗世は口元を両手で押さえた。どうして謝っているのか分からないが、先生に聞かれたくなくてリビングから追出したのだろうということは理解できた。

「率直に言うと、夜桜をしたいの」

そういえば、昼間そんなことを言っていた。「冗談だと思っていたが、まさか本気でやるうと思っていたとは。」

「でも、先生が許してくれるかな？」

「無理でしようね」結菜は竜の言葉を一蹴し「そこで脱走計画よ」誇らしげに胸を張った。

「説明って言っても、実際にやることは先生にバレないようにこっそり抜け出すだけよ。荷物は全部あたしが持つし……ただ、問題が一つ」

ここで結菜は人差し指をピンと立てて一を表す。

「先生の部屋の位置、ですね」

先を読んだ東樹に、結菜は「ええ」と深く頷く。

夏恵の部屋は玄関から一番手前にある。つまり、玄関から寮を出て行くには夏恵の部屋の前を通らなければならないのだ。

「裏口や隠し扉もないから慎重にいけとしか言えないんだけど……とりあえず、十二時に玄関前集合ね」

「夜中にか？」

「先生が寝てからの方が都合がいいでしょ。それまでに眠気に負けちゃいましたーなんてことにならないようにね」

満の問いに答えた後で、結菜は釘をさしながらリビングを後にした。

「ねえ、おれ夜桜初めて！楽しみー」

「そういえばオレもやったことねえや」

「夜なら人もいないからな。贅沢な夜食になりそうだ」

みんなが楽しみにする中で、一人だけ乗り気でない人物がいた。

夜に……夜にお花見なんて……。

それが誰なのかは、言うまでもない。

「お花見ワンデー」その5

時刻は十一時半。

パジャマに着替えていた紗世だが、再び私服に身を包んだ。勿論、夜桜のためだ。

昼間と同じ格好では肌寒いかもれないと思い、一応上着も用意した。そんなに厚いものではないので、気休め程度でしかない。

「やっぱり、行かなきゃだめかな……」

行きたくない、というのが本音だ。

それでも今更そんなことを言っではいけない気がして、今こうしてベッドに腰掛けて溜め息をついている。

行きたくないと言ったところで無駄だということも分かっている。ならせめて自分の意思を理解してもらおうと思い、紗世は部屋を出て左に曲がった。紗世の隣室 結菜の部屋だ。

コンコン、と扉をノックする。しかし、返事はない。

もう一度扉を叩き、今度は声を発する。

「紗世です。いますか？」

それでも返ってくるのは無音。部屋にいないのだろうか。

「先輩？開けますよ？」

そつと扉を開けて中を覗いてみる。そこに結菜の姿はなく、脱いだパジャマがベッドの上に放り出されているだけだった。

もしかして、もう外に出ているのだろうか。早い、早すぎる。

「どっしりよっ……」

考えを巡らせるため視線を落とした。悲しいことに、いくら考えても『流されるしかない』という一点の答えしか出てこない。

「おい」

「ひゃうっ!？」

突然後ろから声が聞こえて、つい素っ頓狂な声を上げてしまった。

「変な声出すなよ、こっちがびっくりしたじゃねえか」

振り返ると、満がすぐ後ろに立っていた。肩でも叩こうとしていたのか、右手が中途半端な場所に浮いて静止している。

「ごめん」

「で、何の用だったんだ？」

「え？」

「え?って……用があったからその部屋の前にいるんだろ」

「うん、ちよっと。でも、部屋にいらなくて」

「多分、もう外なんだろうな……」

待ちきれなくて慌ただしく部屋を飛び出す結菜の姿が目に見えるようだ。それで夏恵に見つかっていないければいいのだが。

「何か話すことなら外に行けばいいし、借りたいものでもあんなら勝手に持っていけばいいんじゃないかね？」

「さすがにそれはどうかと……」

向こうが勝手にあれこれやってんの、こっちだけ気い遣うのは嫌

だろ。と満は言う。気持ちには分かるが、それでも人の部屋から勝手に物を持ち出すのはよくない。

というか、それが目的ではないのだし。

そうだ、と紗世は思った。結菜に言っても問答無用で却下させるのがオチだろう。なら、満に言ってみてはどうだろう。そう思いついて、紗世は思い止まった。

言ってみよう、と。

「また何か考えてるだろ」

……どうしてこの人は、こうもことごとく人の心理に敏感なのだろう。

しかも、それを無遠慮に指摘してくる。たとえ顔に出ていたとしても、口にしていないのだから気づかないフリをしてくれればいいものを。

「考えてない」

「すぐバレるような嘘つくなよ。言いたいことあんなら言え」

一瞬間おうかと考えていたとはいえ、こうも改まって『言え』と言われると言いついて辛い。ここまで鋭いなら自分の言いたいことも察してくれればいいのに、と理不尽に思う。

「ええと……とりあえず、立ち話もなんだし、部屋行かない？」

この居心地の悪い空気を少しでも変えるため、紗世は場所を変えることにした。紗世が自室を指差すと、満は何とも言えない微妙な顔になった。

呆れているような、意表を突かれたような、どう言ったらいいのかわからない。

「お前、今何時か分かって言ってるんだよね？」

「夜中の十二時前？」

答えは正解のはずなのに、何故か深く溜め息をつかれた。「間違っ
てないよね？」と思わず確認してしまった。

「間違っていないから厄介なんだよ。普通そんな時間に男を部屋に招
き入れるか？」

「でも、満は私を起こしに部屋に入ったことあるじゃない」

そう答えると、どういいうわけかまた溜め息をつかれてしまった。そ
んなに呆れさせるようなことを言っただろうか。

「分かった。もう何言っても理解しそうにないから、部屋行くぞ」

満の言っていることがよく分からない。紗世は頭に疑問符を浮かべ
ながら、部屋へと向かう満の後に続いた。

「分かったって、何が分かったの？」

「お前がよっぽどのバカだってことが」

言って、満は何の遠慮もなしに紗世の部屋に入って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3745v/>

内気少女の静まらない夜

2011年9月1日06時40分発行